人でつづる保育史

松野クララの人間的側面

——研究ノート——（その二）

南雲元女

禰の死亡とその後のクララ

松野は農商務省山林局の林業試験場長として現職中、明治四十一年五月十四日に死亡している。行年六十二歳であった。

これについて「林業先人伝」[7]は、つぎのように記述している。

〝先生は平素あまり丈夫な体質ではなかったが、病気のために仕事を休まれたことはなかった。晩年は心臓を弱められ、とかく健康が勝れなかったけれど、病勢が悪化して臥床する数時間前までは、いつものように夫人たちと卓を囲み閑談されていたが、明治四十一年（一九〇八）五月十四日、眠るようにして昇天された。その訃を驚き慟哭しないものはなかった。葬儀は、翌十五日午後三時に番町教会で、キリスト教によって式が行なわれ、霊柩は粛々として門下生等にまもられ、緑したたるような青山の外人墓地の一隅に納められた。「古哲日道之所レ存師之所レ在也」と、すなわち、先生が生涯をかけて開拓された日本の林学が尽きない限り、そこに先生の面影は永遠に尽きないであろう。〟

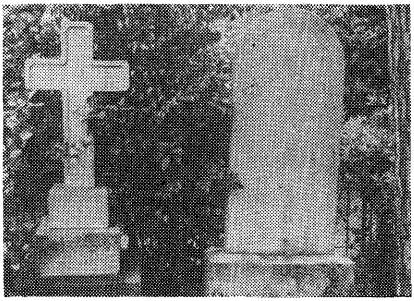
亡き恩師を偲ぶ追悼の詞でもある。

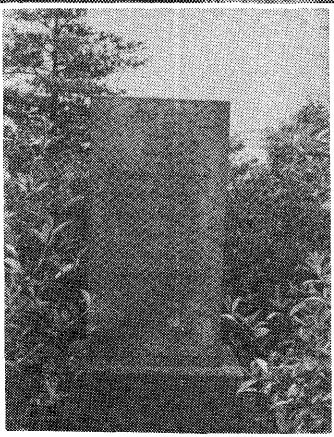
ところで、松野家が番町教会の会員だった記録は残っていないときく。会員でなかった松野家の葬儀が、番町教会で執り行なわれたのは、同教会の有力会員であった巌谷小波の紹介によるものと考えられる。（番町教会現牧師、杉浦義人氏談）

松野の墓は、東京都青山霊園西通り四側という標識の建った、霊園の中央通りを西に入った奥の外人墓地、生い繁る生垣を巡らした一角に、静かなたたずまいを見せているが、墓碑の

素材が大理石のためか、風化がはげしく、江崎政忠（林学者）が松野の来歴を記した裏面の碑文は、殆んど判読できないまでに摩滅している。松野の碑にむかって左わきに、十字架をかたどった、文の石碑がある。さらに、生垣で隔てた隣接の場所には、クララの実妹（Emma）（実姉との説もある）の夫、フリードリッヒ・プチール（Friedrich Putzier）（一八五一―一九〇一）の墓もある。

プチールは、松野家に寄寓して、旧一高、東京外国語学校、その他でドイツ語を教えた、いうところの〝お雇い外人教師〟であった。この事実は碑面に刻まれているのである。





▲右が松野礌、左が文の墓
◀フィリップ・プチールの墓

肝心のクララの墓であるが、これについては、分骨さえも同墓地に葬られていないことが、過去の東京都調査でも確認されているのである。これは、松野家の墓地管理費の収納を主目的に、霊園事務を担当した故石田常英氏が、遺族関係を調査した際の結果に基づくものである。また都史紀要「東京の幼稚園」の執筆者である手塚竜麿氏も存在しない旨を立証している。

後述するように、クララの死亡が昭和十六年ベルリンだとすれば、戦時一色にぬりつぶされた時代であり、険悪な社会的背景のなかで、外国の遺骨を国内に搬入するための適切な手段方法は見い出し得なかったのかも知れない。同時にそれをするにふさわしい近親者などが当時、存在したかどうかも疑わしいように思う。いずれにしても、最近、墓前に香華をささげた形跡のないのは、まことに淋しいことである。

松野家の墓地台帖には次のように記帖されているのである。

松野礌寄寓　独逸人フリップ・プチール西歴一八五一年八月十二日生れ　明治三十四年五月二十一日午後四時、土葬

松野　礌　弘化四年三月七日生　死亡　明治四十一年五月十四日　午前十一時　心臓神経痛　明治四十一年五月

十五日　午後三時　土葬

独乙人　アール・エン・オンリー（註、文）

独逸国　クレーフェルト市　麹町下二番町一番地　松野　磡方　明治三十四年七月十六日

とあり（原文のまま）文の場合は、七月九日の死亡に対し、埋葬は十六日で、土葬の表示がないところから、他の土地で火葬に付したのち、運ばれてきたことも考えられるのである。

クララの帰独後は、松野家の跡目相続者もなく、縁故者も判明しないままに、一時は無縁墓地の取扱いをされたという。これを伝えきいた国立林業試験場の職員が発起人となって、関係者から寄付金を募り、その利子のなかから、墓地管理費を支出して、東京都に納めているとのことである。その実務は現在、日本林業技術協会が担当しているときく。

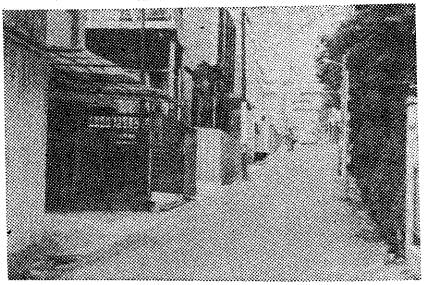
松野家の縁戚としては、松野の生家の後継者である大野家の女当主が、東京都目黒区に、また、松野の姉の嫁ぎ先である長松家の当主が広島県大野町に、それぞれ居住するが、両家とも、クララについては殆んど関知しておらないとのことであった。

番町の住居とその住人

松野家の人たちが当時居住していたと思われるあたり、巌谷小波の〝下二番町の坂の途中にあった〟〝のちの広田公使邸……〟（日本幼稚園史）を足がかりにして、筆者は数次にわたって付近を戸口踏査したが、かつての高級住宅街は、ビル、マンション、事業所等々に変貌して、一世紀まえを偲ぶ何ものもない。ときの流れに沈んで消えたように、当時のことを伝えきいた人々さえ現存しないほどだから、筆者が戸口を訪れて、物売りと間違えられたり、うさんくさそうに見られて相手にされなかったりしたことも、無理ではないだろう。このようなことで、ほとほと嫌気がさし、踏査の中止を決意した直後、東京都千代田図書館の鈴木理生氏から、その辺一帯の古地図や風俗画報まで添えた貴重な資料に基づいて、懇切なご指導をいただいた。それによると、松野家の住所は、明治九年の東京都へ婚姻願を提出した時点で、下二番町三十三番地であったものが、郡区町村編成法の施行（明治十一年十月二日）による、地番改正に伴って下二番町一番地に改められた。更にその後の地番改正によって、同じ場所が二番町一番地にかわっている事実が確認されたのである。正確には、現在の東京都千代田区二番町一番地で、イスラエル大使館の東に隣接して千代田マンションがある。その南側の番町コーポ、そのまた南に吉川重喜氏宅があ

る。このあたりにほぼ間違いないと思われるが、松野家が住まった当時の建物などは跡形もない。

いまこの場所に住む吉川氏は、戦国武将吉川元春の末裔と伝えられ、山口県下に本社と山林現場を所有する林業開発会社の経営者だという。しかもクリスチャンである夫人の霊名がクララだときかされて、偶然の符合に驚ろかされたのである。



▲左側の民家が旧松野邸あと

小波のいう〝のちの広田公使邸……〟云々は、A級戦犯として、文官でただ一人処刑された戦前の軍閥内閣の総理大臣、広田弘毅かと早合点したが、これは広田弥太郎とよぶ土地の素封家で、全くの別人であることが確かめられた。したがって小波の〝公使〟の字句は、無性にひっかかるが、解明できないままでいる。

夫君なきあとの松野家は、クララ未亡人のほかクララの妹(姉?)であるフリードリッヒ・プチール未亡人、それに故長松幹の未亡人で亡夫の姉・章子と三人の未亡人世帯であったようだ。

「林業先人伝」(前出)に〝先生なき後の松野家は、異国の空に寂しく暮らす久良々未亡人のみとなったが、亡女の遺愛の二児と数年前夫人の郷里から来朝し、先生の一家族となった未亡人の姉君および先生の青年時代まで面倒を見てくれた姉婿、長松幹未亡人等がおられた〟

とあるが、文の残した二人の子どもが、そのときまで、はたして生存していたかどうか、判然としない不確定要素が多い。遺児は二人ともすでに、死亡していたのではないかと思えるのである。

さらに「林業先人伝」は記述して〝林業に関する先生の遺著と共に内外幾多のおびただしい蔵書は、挙げて未亡人から大日本山林会(松野が生前に創立した)に寄贈されたが、大正十二年の震災で全部烏有に帰し、ここに先生の思想を深く尋ねる途が断たれたことは誠に遺憾である〟

と、その間の事情を明らかにしている。蔵書の寄贈は、亡夫の意を体して行なわれたのであったのかも知れない。

家というものに対する松野の考え方が、それを端的に物語っているのである。

〝松野家は、自分で勝手に創設したものだから、自分一代で

潰れても、祖先の祀を断つことにはならない。自分には、林学という遺子があって、これが自分の志を継いでくれるから、松野家は永久に絶えない〃

と、松野は生前よく口にしていたという。クララ自身とすれば、自分のなきあとも、永久に日本の保育が残り、しかもそれは大きく花ひらくであろうことを信じ、期待感が強かったのではないか、それがまた、クララの心のささえにもなっていたものと考えられる。

松野の死亡した翌明治四十二年、旧門下生を中心に関係者が故人の遺徳をしのび、千葉県清澄山の東京大学演習林内にある外国樹種植栽地一帯を「松野記念林」に指定したのである。また、その地域の一角に顕彰碑が建立された。顕彰碑は高さ二メートルに及ぶ自然石で〃松野先生記念碑〃と刻まれている。裏面には、林学博士川瀬善太郎の撰により、松野の人となりや、わが国の林業教育に果たした先達的な役割と、不朽の功績をたたえる趣旨の碑文があるが、ここでは省略することにしたい。

植栽事業への積極参加

松野記念碑が建てられた周辺一帯の記念林植栽にあたっては、クララ自身が異常なまでに執念を燃やし、積極的なアプローチをして、外国樹種の植栽を実現するための方向づけをしたといわれている。クララの真剣な取り組み方には、林業関係の専門家も一様に胸を打たれたふうで〃婦人ながら、さすがはドイツ魂の持ち主〃〃自然を愛する民族精神の発露の結果である〃として、クララに賛辞をおくったときく。

このような、クララの働きかけや関係者の努力にもかかわらず、植栽した外国の原産樹種は、立地条件が悪かったため、南太平洋から来襲する台風にあおられて、風倒折損をくり返し、改植につぐ改植を重ねてきているが、昨今では、僅かに往時の面影をしのばせているに過ぎないと関係者は慨嘆するとともに、〃クララ未亡人のあの思想は、われわれ日本人技術者に対し、百雷のひびきを以って警告を与えるものと思わなければならない〃といっている。クララ自身も日本林業の向上発展に、大きく寄与していることになろう。それはクララのゲルマン・スラブ系人としての重厚さを誇る民族意識もさることながら、彼女の信仰による社会性と、人類愛に由来するものであっただろう。また事にあたっての強い信念と周到な心構えが、そのまま精神的ないし物理的な重圧をはねのけての群馬行となり、蔵書の寄贈や外国産樹種の植栽への、積極的な事業参加にもつながったものと考えられるのである。

クララの帰独と没年

クララは、やがて番町の邸を引きはらって、日本に別れをつげ故国ドイツへ帰ることになるのである。しかし、その前後の事情や引上げの時期などは、さだかではない。

同時に、日本を離れたあと、母国でおくった日々や生活環境、晩年における幸、不幸、それに人間的なかかわりなど、皆目つまびらかでなく、真相を知る端緒も見い出し得ないのである。

ただ一つ、クララが昭和十六年に八十八歳の高齢で世を去ったことは、山口県美東町教育委員会の調査で確認できそうだ。ただし、前に引例した日本近代教育史辞典の執筆分担者は、クララの没年を書いた記憶がないということだった。「一九四一」の数字は、執筆者以外の誰かが書き加えたらしいとの話である。出版社でもその間の詳しい事情を知る人はいないという回答であった。

クララの死亡が昭和十六年だとするなら、草創期の東京女子師範学校付属幼稚園で、クララと幼児教育面の行動をともにしたわが国の保育者第一号、豊田芙雄[8]が郷里の水戸で九十六歳の生涯を閉じたのだが、奇しくも同じ年の昭和十六年であった。

おわりに

いままでみてきたように〝松野クララの人間的側面〟の解明にはほどとおく、わずかにその片鱗に触れ得た程度のものに過ぎない。文字どおり〝まぼろしの幼児教育者〟のままに終ってしまった。

筆者がこの稿をまとめる過程で気づいたことは、クララと八月という月との因縁である。クララの来歴をみると、生まれたのが八月であり、来日も八月なら、結婚もまた八月、そして群馬への旅が八月であった。クララの帰独から死亡まで「八月」とのめぐりあわせが、ついてまわるような、同時にまた、八月の事象を追求していく過程で、クララについての新たな発見と事実の解明が可能になるように思えてくる。

ひきつづき、クララの解明にあたっていきたいものと考える。

（前橋保育専門学校）

参考文献・資料

(7)田中波慈女編著「林業先人伝」一九六二年日本林業技術協会
(8)豊田芙雄（一八四五―一九四一）藤田東湖の姪として水戸に生まれ、生涯を幼児、女子教育にささげた。